

---

# ブラウさん出張編 ~馬鹿との遭遇~

澄田 康美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブラウさん出張編 ～馬鹿との遭遇～

### 【Nコード】

N74430

### 【作者名】

澄田 康美

### 【あらすじ】

ゆかりんの策略によって、ブラウさんはある者と対談する事になった。その者の名は・・・ふんどし。

(前書き)

どうも、澄田 康美と申します。

この話は、「東方」と「PLUTO」の二作がクロスオーバーした作品、

「東方冥王伝」に出てくるブラウ1589というキャラクターと、

東方Projectの二次小説、

「東方ギャグつとけ！」の主人公、ふんどしというキャラクターが、

口論をする話です。

意味不明でいらたぬ所も多いと思いますが、

どうか温かい目で見てください。

ではどうも。

その二人は、隙間の中で出会った。

隙間の中にあつたテーブルに、向かい合うように、二人は座つていた。

二人は紅茶も何も飲まず、ただお互いを見詰め合っていた。

少し、状況を解説せねばなるまい。

一人は、これまでに幾多の幻想の兵者つわものどもを口論で圧倒し、

敗れ去つた姿を鑑賞し、楽しんできた狂気のロボット      ブ  
ラウ1589。

もう一人は、記憶をなくして幻想入りし、霊夢の所でそれとなく世話になり、

とにかくマイペースを貫くただの馬鹿な人間      ふんどし。

なぜこの二人が、こうして向かい合っているのか      説明せねばなるまい。



ある日、例のごとくブラウに口論にてぼろぼろにされた紫。

犠牲となったレミリア、幽々子、幽香の為にも、

どうにかあのロボットに一泡吹かせてやりたいと、彼女は切に願ったのだ。

だが、彼女の知り合いにはあのロボットに対抗できる程の口げんか上手なぞいない。

めぼしい者は全て、ブラウが丸め込んでしまっていたのだ。

もちろん、物理的な実力者ならいくらでもいるのだが、それでは意味がないのだ。

あくまでブラウをギャフンと言わせるには、口論しかないのである。

では、彼女にもう打つ手などあったのだろうか？

ひたすらに考え尽くした彼女は・・・ある答えに行き着いたのだ。

そつだ！！他の世界からあいつに口げんかで勝てそうな奴を探そつ！！

そんな彼女の白羽の矢が立ったのがそつ  
ふんどしであったのだ。



紫はふんどしを呼び出し、ブラウを誘い込み、今の現状に持ち込ませたのである。

しかし、こうして向かい合った二人は、口論を始める雰囲気には中々ならなかった。

ブラウはともかくとして、ふんどしはリアルに何も聞かされず、

ここにいらっしゃるのだから、何も出来ずそわそわするのは無理もない。

それ以上に、目の前にいる存在が  
ふんどしには怖かったのだ。

その目ではつきりと見える巨大な配線、虚ろな目、どことなく不気味な顔。



その全てが組み合わさる事で、ふんどしにはブラウが

お化けかその類に見えていたのだ。

だが、このお化けは 当然お化けではない。

ブラウがそろそろという所で ふんどしに、語りかけてき

たのだ。

『 私の名前は、ブラウ1589だ

君の名前は、何だね?』

そう、素性を知らないどころか、まだ挨拶もしていない二人。

ブラウの事に若干怯えながらも、ふんどしはどうか返事を返した。

「え、ええっと・・・ふんどしっす」

『 フンドシか・・・

フンドシと言えば、人間の男がつける下着の類ではなかったかね  
?』

「そっすよ」

それを確認した瞬間に

ブラウの口撃が始まった。

『では、君は下着のような自分の名前に  
不満を持たない  
のかね?』

「いや、だってこれ、霊夢が適当に付けてくれただけだし・・・」

『ほう、それはおかしくはないかね?君は自分の名前が無いのかね  
?』

「ええっと、俺はその・・・自分の記憶をなくしてるんす  
だから、霊夢に呼び名を適当に決めてもらったんす」

『なるほどなるほど  
では適当に付けられた名に君は  
まったく不満がないの  
かね?』

「まあ・・・その時は、俺が悪かったって言うか・・・」

ハゲから汗が流れ、戸惑うふんどし。

ブラウは当然、その隙を見逃さず、間髪入れない口撃を入れた。

『では、後ろめたさがあるから、君はその名に満足したのかね?  
それとも君は、あきらめが入ってその名で納得したのではないか  
?』

「い、いや、そんなつもりじゃ  
・・・」

『そんなつもりじゃない？嘘を言っても無駄だよ  
君は確実に                    その名に不満を持っている  
だがその不満をぶつけようにも、自分への負い目がより君を追い  
こみ、

結局は場の流れに身をまかせつきりとなって、今に至る  
違うかね？』

ブラウの容赦のない口撃に、ふんどしもたじたじな様子である。

なおもブラウは、追い討ちと言わんばかりに口撃を撃ち込んで行っ  
た。

『いい加減に目覚めてはどうだね、フンドシ君？

君は今のままでいいわけがない

君はもつと                    強くいらねばならないのだ

恐らく君の名がそうだったのも、君が弱かったからだ

そうだ、誰も悪くない

悪いのは君の弱さだ

そうだろう？言い返す事ができるかね！？できないだろう！？

そう、君のアイデンティティーなど、所詮はその程度なのだ！！

君は、自らその手で放棄したのだ！！自分のプライドを！！

今の君は、人ではない！！虫けら以下の存在だ！！

さあ、吐き出すのだ！！君という人間を！！君という存在を！！

君の歪んだ大義名分レトリックを、その手で見せてくれ！！

いや、私が望んでいる物は違うな！！

君の壊れた姿を

崩壊した姿を

私に見せてく

』



「なああんだ、楽しいか？」

ふんどしが言い放った冷たい一言が  
さった。

ブラウに重く突き刺

その威力は、自分を封じ込めていた槍以上の威力を誇っていただろ  
う。

それほどまでに、ブラウは　　ダメージを負ったのだ。

ふんどしが何となく言った、その一言に。

ブラウの計算どおりならば、

ふんどしの心は折れ、泣き崩れ、ぼろぼろになった姿が拝めた  
はずだったのだ。

だが、目の前の存在は泣き崩れるどころか　　凜とした姿を  
していたのだ。

その姿のまま、先ほどの一言を言われたからこそ、

ブラウは　　凄まじいダメージを負ったのだ。

ブラウは自分の中の電子回路が、ショートを起こしかねない程の事  
態に襲われていたのだ。

なぜだ？なぜ目の前の人間は　　私が期待してい  
た姿になっていない？

なぜそんな強い目をしてられるのだ？なぜ自分を保ってられる  
のだ？

なぜ　　私を哀れな目で見ているのだ！？  
やめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめる  
やめる！！！！！！

そんな目で私を見るな！！私を憐れむな！！  
私を私を私を私を私を私を私を私を私を

自分を保てなくなりそうになったブラウに、ふんどしはそっと

ブラウの手を握った。

力強く、ブラウの手を握った。

握った後で、ふんどしはさっきの真顔から笑顔に変わって、

ブラウに                    言ったのだ。



「もっと、楽しい事はないか」



その一言が、ブラウのショートしかけた回路全てを  
に直してしまった。  
すぐ

あまりにもすぐに、あまりにも綺麗に、あまりにも鮮やかに

壊れそうになったブラウを、ふんどしは  
助けたのだ。

自分の事を散々否定した存在を、

自分の事を快くは思っていないであろう存在を、

自分の目の前で一人、潰れそうになった存在を  
ふんどし

は助けたのだ。

もちろん、ふんどしにその気があったのかどうかは定かではない。

いや、恐らく助けようとしてこんな事をしたのではないだろう。

ふんどしはただ

目の前の存在に、

楽しさと言える物を教えたかったのかも知れない。

それがたまたま、ブラウを助ける形になったわけである。

手を握られたブラウはその瞬間に

全ての答えを導き出し

たのである。

そうか、彼は馬鹿なのか



たとえいくら言葉を並び立てても、いくら相手を陥れようとしても、それらが全て効かないのなら、何の意味も持たない。

馬鹿は聞く耳を持たないと言う。ならば、ブラウがいくらふんどしを陥れようとしても、

それらは全て徒労でしかない。

世間でいう所の

無駄骨である。

考えてみれば、今までブラウが口論してきたのは、総じて頭が悪い者ではなかった。

むしろ皆、常人以上に冴えている存在であった。

だからこそ、ブラウの策に皆、飲み込まれていったのである。

しかし、今日の前にいる存在は違う

ただの人間であるのに、今まで会って来たどんな敵よりも

ブラウには大きく見えた。

否、ただの人間であったからこそ、ブラウは勝つ事ができなかったのだらう。

もし彼が人間以外の存在であったのなら、彼に勝機はあったのかも  
しれない。

だが、彼が人間であった為に、ブラウは勝機を逃したのだ。

その事をようやく理解できたブラウは、わかった事を  
と  
りあえず口にした。

『くくくくく……人間というのはやはり難しいものだ……』

突然の含み笑いに、不気味に思ったふんどしだが、すぐに笑顔に戻っていた。

たとえ相手が誰であっても、ふんどしは笑って接する。

ふんどしはとうしようもないぐらい馬鹿である。

火中の栗を平気で取りに行くぐらい馬鹿である。

虎子のためなら、喜んで虎穴に入って行くぐらい馬鹿である。

たたりなど恐れず神に触れようとするぐらい馬鹿である。

だからこそ、ふんどしはブラウに勝てたのだ。

いや、本人は勝った事すら知らないだろう。

そもそも、何も聞かされずにここにいるのだから、それも当然である。



そんなふんどしでも、言う事ぐらいはわかっている。

さっき自分で言った事である。

「なあ、もっと楽しい事しないか？」

『では、何をしたいかね、フンドシ君』

「そうだなあ

」

しばらくして、満面の笑顔をした紫が、二人のいる空間へと足を運んでいった。

うまくいっていれば、今頃ブラウのあん畜生もきつと

という期待を胸に膨らませていたのだ。

だが、紫の目に飛び込んで来たのは

望んだ答えとはまったく違ったものであったのだ。

二人はとても楽しそうな談笑を交わし、見ていて微笑ましい程の光景であるのだ。

『それで、私は言ってやった訳だ  
彼はもっと頭を使うべきだとね』

「ははは、それじゃ頭が武器みたいになってるって」

二人の楽しそうな雰囲気をぼーっと見ている内に、ブラウが紫の存在に気づき、

軽快に声をかけてきたのだ。

『おや？紫ではないか  
そんな所で、なぜぼーっとしているのだ？』

「い、いや・・・別にその・・・」

「ゆかり〜、いきなりこんな所につれてくるとかどういっ了見だよ〜  
ブラウさんがいなかったら、多分俺、退屈で死んでたぞ〜」

「え？ブラウといて、楽しかったの？」

「見てわかんないのかよ〜？」

紫の目論見では、

ブラウがふんどしと口論し、ふんどしが打ち負かしてくれると考えていたのだ。

もちろんそんな事をして、楽しかったと言える状況になるはずがない。

紫はそう考えていたのだが、二人は口論らしき事なごろくにしなかつたのだ。

いや、最初はしようとしていたのかもしれないが、ふんどしの能天気さの前に、

さしものブラウも口論するのが馬鹿馬鹿しいという形になったのだ。

今は口論などせず、お互いの身の上話をそれとなくしていたわけがある。

まあふんどしの場合には記憶がろくにないので、ほとんどブラウの一人話になった訳だが。

それでも二人は楽しそうであった  
紫は当然、そんなブラウを見た事がなかった。

いつも皮肉と毒舌しか発していない存在は今、

ただ楽しそうに会話を交わしているだけの存在になっていたのだ。

紫はその時

それ以上語るうとはしなかった。

今は

二人が楽しそうに語る姿を見ておく。

それでいいと、紫は自分に言い聞かせたのだ。

だが、時間という物は中々に待つてはくれない物である。

紫がそろそろという所で、ふんどしを元の世界に返したのである。

ふんどしが「ばいばい」と手を振っている時に、ブラウもまた手を振り返していた。

隙間が閉じ、隙間の中に二人つきりになった紫とブラウ。

先に語りかけてきたのは  
もちろんブラウであった。

『今回は、私の負けだったよ、紫』

「ええ！？そうだったの！？ていうか口論したの！？」

『そうだな、私が一方的に喋るだけで終わってしまったよ  
彼は私は何を言っても、まったくぶれずに私を見ていたよ  
いや、彼が馬鹿だったから、私の話を理解できなかったのだろう  
な』

「そうだったのね・・・」

『いやはや、それにしても中々に面白かった人間だ  
また会う事が出来るなら 会いたいな』

「・・・それって、嘘じゃないわよね？」

『ああ、嘘なんかじゃないよ  
本心さ』

「だったら、また私がセツティングしてあげてもいいわよ？」

『いや、今度は二人つきりではなく、皆で楽しくやりたいのだが  
頼めるかね？』

「そんな事、私の手にかかったら余裕よ」

『そうか 　それなら安心したよ』

ブラウが安堵の顔を浮かべている様子に、紫は 　ある事を  
思っただのだ。

こいつって・・・もしかしたら『そんなに悪い奴じゃない・・・と

でも思ってたか？」

「ちょ！？人が思いふけた事を口に出さないでよ！！」

『おやおや、私が言ったとおりの事を考えていたとは・・・君は本当に単純だねえ』

始まりました、ブラウ選手VS紫選手の戦いが、今ゴングを鳴らしました！！

先手はもちろんブラウ選手です！！

『そもそも、自分ではなく他人に口論をさせようと言う考え自体がおかしいと、

私は思うのだよ

それで私が負けたとしても、それは君の勝ちと言えるのかね？』

「だ、だけど！！負けた以上はあなたに・・・」

『自分が用意した者が勝てば、自分が勝ったつもりでいられるのか？  
だとしたら君は、あまりにもおめでたい存在だな』

おーっと、これはブラウさんの一方試合状態だあ！！

「わ、私はそんな・・・」

『逃げるか？また逃げるのか？すきまババアよ！！  
そうやって私から逃げ続けて、どうしようと言うのだね！？  
そんな事だから、君はいつまで経っても私に勝てないのだ！！』

「あ・・・う・・・」

もはや呂律も廻らない紫選手に、ブラウ選手のラッシュが入ります  
！！

『以前君達が徒党を組んだ時もそうだ！！

一人では勝てないと踏んだ君達は、

何を思ったのか一連となって私に挑もうとした！！

しかし所詮は恨みだけで集合した烏合の集！！

三本の矢を折る事は難しいが、一本一本なら折るのは容易い！！

君たちが本当にいい例じゃないかね！！

これからは、君たちが諺の辞書にでも載るのはどうだろうかね！！

数だけを揃えた存在も、私の前では何の意味もなさなかった事を

！！

いや、君こそが既に意味の無い存在になろうとしていたのだろうか  
な！！

視野を広げる事が出来ず、ただただ目の前の目的に執着する！！

しかしその行動こそが最も意味の無い事だと言う事を、

君は理解できていなかったのだ！！

私を倒す為にした小細工も作戦も手段も方法も手の内もやり方も

行動も！！

これ全ては無価値に候・・・違つかね？』



最後の一言によって、境界の世界は崩壊し、外の綺麗な世界に変わっていった。

そして紫は、思いっきり涙を流して、隙間の中へ逃げ出していった。

「うわああああああ!!!!!!!!!!ブラウの馬鹿ああああああ  
「!!!!!!!!!!!!!!」

最後の捨て台詞と共に、威厳を粉々にされた賢者は  
その場を後にしていった。

ブラウはその姿を眺め、いつもの笑顔を見せつけたのだ。

『くくくくく……やはり楽しいものだ、こうして壊れた姿を見るのは  
しかし、たまには純粹に楽しい時間を過ごすのも、ありかもしれないな』

空を眺めてつぶやくブラウは  
友と呼べる存在を思い出していた。

『そうだ、友達の元にも行くとするか  
』

思い立ったブラウは、その道程を歩いていった。

ブラウはレベルが上がった

人間への興味を覚えた

たわいの無い雑談術を覚えた

誰かに向ける為の愛を身につけた

ブラウさん出張編  
く馬鹿との遭遇  
FIN

(後書き)

後書き

以下危険ゾーン

澄田

「これは・・・いい話なんでしょうか？  
ちよつと出てきてください、師匠(仮)」

荒井師匠(仮)

「なんだね、康美君？」

澄田

「いえいえ、これとりあえずやってみたんですけど・・・  
満足のいく結果ですか？」

荒井師匠(仮)

「そうだな・・・ううむ、難しい所だ  
あえて言うのなら・・・悪くはないと思つぞ」

澄田

「え？本当ですか師匠(仮)？」

荒井師匠(仮)

「まあ、あくまで私は(仮)の存在なのだから、  
君の望んだ答えを出す事はできない」

澄田

「それでもいいんです・・・ちょっと気持ちが悪くなりましたあ・・・」

荒井師匠

「そうかね、それだったらいいんだが・・・な！？康美君！？なぜ私に寄りかかっているのだ!？」

荒井澄田

「すみましえん・・・この話書いてたら・・・眠くなってしまっ  
て・・・」

「このままでもいいですかあ？」

荒井師匠

「う、うむ・・・ちょっとぐらいなら・・・」

澄田

「ありがとうございますしゅっ・・・」

荒井師匠

「ちょ、ちょっとだけだ!!ちょっとだけ・・・」

澄田

「はあい・・・ZZZ・・・」

荒井師匠

「・・・やれやれ、寝てしまったか  
仕方ない、起きるまでは、傍にいてあげよう  
・・・私も、つくづく甘い男だな・・・」

まあ、弟子のこんな姿を見たのなら、我慢も出来るか  
……おや……私も眠くなってきたな……仕方ないか……  
これも……」

これぞ、わしにしか出来ない最終奥義!!

電波+妄想という究極の合わせ技!!

……すみませなんだ師匠……(――)(m

気分を害したのなら謝罪しますだ。

だけど!!どうしても書きたくなっただけです!!この気持ちに、嘘  
はありません!!

とりあえず、狂気のロボットと馬鹿の口論?はこれにて終了です。

やりたかっただけです、まあ勘弁してくださいな。

スペシャルサンクス

ブラウ1589 様

ふんどし 様

八雲 紫 様

荒井 スミス 様

では、このような粗末な駄文をお読みいただきまして、

真にありがとうございました(\*^|^\*)

by 澄田 康美

P S ・これがわしの電波の限界ですう・・・



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7443o/>

---

ブラウさん出張編 ～馬鹿との遭遇～

2010年11月6日16時30分発行